

洋学の日本化 —今西錦司と南方熊楠—

川勝平太

国際日本文化研究センター

[1] 問題の所在

明治以来、日本に導入された学問は、自然科学・人文科学・社会科学の全分野におよびました。当時の呼び名は「洋学」です。「洋学」は、中国の古典を学ぶ「漢学」、日本の『古事記』『万葉集』などを柱とした「国学」と区別された西洋の学問です。西洋起源の学問体系を一式全部、強制されてではなく、主体的に摂取したのは、非西洋圏では日本が唯一の例です。これはその事実自体が特筆に値します。その結果、大学の学問や公教育の全分野において「洋学」が普及しました。

ここでとりあげる今西錦司(1902-1992)と南方熊楠(1867-1941)も例外ではありません。二人とも青年時代に「洋学」にドブプリと漬かりました。両者とも洋学の造詣は深いのです。しかし、西洋とは異なる独創的学問をうち立てました。両者の学風は非西洋的ですが、すなわち「東国の学風」をもっています。同時に、地球を視野に入れた全体論的(ホーリスティック)な構えをあわせてもっており、東洋風でありながら、国粋主義やナショナリズムとは明確に一線を画しています。

今西錦司は京都に生まれ育ち、鴨川でのカゲロウの幼虫の観察をとおして、生物の世界の本質は種の「棲み分け」であるという理論を立て、棲み分け論にもとづく独自の進化論を立てました。世界の霊長類研究の草分けでもあります。その学問業績は『今西錦司全集』全十三巻(講談社)にまとめられています。その第一巻に収められている

『生物の世界』(1941)は、今西が遺書の積もりで書き、主著ともいふべきものです。『生物の世界』の英訳版(2002)でも、編者パメラ・アスキス氏が手際よく解説しています。『生物の世界』はつぎのような五章から構成されています。

- 第一章 相似と相異
- 第二章 構造について
- 第三章 環境について
- 第四章 社会について
- 第五章 歴史について

最終章が「歴史」であることに、読者の注意をうながしたいと思います。「歴史」とは人間の歴史に使われているのがあたりまえの時代に、あえて「生物の世界」の結論の章に用いているのです。そもそも生物に対して「歴史」という言葉を用いたこと自体が、人間中心主義からの決別をしめすものです。

南方熊楠は、紀伊半島の和歌山県に生まれ、中学卒業後、東京帝国大学の予備門を中退し、あとは独学です。1886年に20歳で訪米、1892-1900年の26歳から34歳までをロンドンに滞在して大英博物館で学問修業をしました。1893年から1914年に*Nature*に50篇の論文、1899年創刊の*Notes and Queries*誌上には1933年までに323篇のエッセーを寄稿した。特に粘菌・苔・藻の研究で名をなし、新種発見では群を抜いています。当時知られ

ていた粘菌196種のうち99種は南方の発見です。 *Minakatella longifila* G. Lister というミナカタの名をもつ新属(genus)の苔の発見もあります。森林保護などのエコロジー運動の先駆者でもありました。カーメン・ブラッカーが1983年の英国民俗学会の会長就任講演で「埋もれた日本の天才 (a neglected Japanese genius)」と呼んだのはよく知られています。南方熊楠が亡くなったとき、在野の碩学の死を惜しむ和歌を昭和天皇が詠まれたのも特筆に値する例外です。

今西と南方は独自の全体観を持った学者であったので、その影響は多方面にわたります。その影響は日本人の歴史観にも及んでいます。

今西錦司の自然観は文明の生態史観に道を開きました。南方熊楠の自然観は地域ごとの多系的な内発的發展論に道を開きました。

こうした点から、両者を歴史観との関わりで取り上げる理由は十分にあると思います。両者の自然観が日本人の歴史理解にどのような貢献をしたのかが論点です。

ここで、日本における近代歴史学の発達についてまとめておきます。

古文書にもとづく実証研究を軸とした近代歴史学はドイツの歴史家ランケが確立しました。近代歴史学はランケの弟子リースによって明治日本に導入されました。リースが講義したランケの世界史はその内容が西洋史でした。そこには肝心の日本の歴史は入っていませんでした。そこで日本の古文書を扱う「国史(日本史)」の科目が新たに設けられました。また、明治知識人の教養は漢籍でしたから、中国の古文書を研究する「支那(東洋)史」の科目も新しく設置されました。こうして明治期に「世界史(西洋史)」、「日本史」、「東洋史」の三つの歴史が成立し、それぞれがパラパラに研究され叙述され、三つの歴史の関係が問われないまま、今日に至っています。

三つの歴史に共通するのは、第一に近代歴史学の基礎である緻密な実証主義です。第二に西洋史をモデル(鑑)とすることです。第三に発展段階論であることです。まずドイツ歴史学派の発展段階論が摂取されました。ドイツは後進国としてイギリスを追いかけましたので、日本と事情が似ていたのです。福田徳三がその代表です。そして、その後、西洋史をモデルにした発展段階論として日本人の歴史理解に最大級の影響を与えたのはマルクス主義です。

マルクスの史的唯物論(唯物史観)は戦前・戦後の日本の知識人に深甚な影響を及ぼしました。その背景には、まず『資本論』が日本の目標であったイギリス資本主義の限界を指摘し、未来は社会主義になると論じていたこと、また、1929年に世界経済が大恐慌に陥り資本主義体制への信頼が揺らいだこと、そして、資本主義に代わる社会主義がロシアにすでに誕生していたという事情があります。

戦前・戦中の日本政府はマルクス主義者を抑圧しました。戦後になって、マルクス主義者は自由を謳歌しました。政治的にはリベラル民主主義でしたが、歴史学は、実証史学を別にすれば、マルクス主義一色に塗りつぶされたと言っても過言ではありません。一例として、日本史理解に権威的位置を占める『岩波講座・日本歴史』の第一期(1960年代)、第二期(1970年代)の編者はマルクス主義者で占められ、時代区分も唯物史観の公式(古代奴隷制—中世封建制—近代資本主義)に準拠しています。西洋史をモデルとし、そのモデルを「日本という地理的範囲」を出ないようにして国内の歴史に適用したマルクス主義史観の輝かしい成果だといえます。

1970年代からは近代化論が流行しました。これはヨーロッパ・モデルにアメリカ・モデルを加えたものです。冷戦構造が時代背景にあり、社会主義社会が資本主義社会より

も高度であるというマルクス主義理論に挑戦したもので、社会主義と資本主義を対等のものとしてならべ、伝統社会が近代化に向けて離陸する道には、社会主義の道と、自由主義の道の二つが選択肢としてあることを示したものです。

こうした「洋学」の歴史学の潮流に対して、今西錦司と南方熊楠の東洋風の知的巨人の果たした貢献について、結論を先に述べておきます。両者は、日本の歴史学の主流であった西洋中心主義の唯物史観や近代化論とは異なる哲学に立った歴史観を提示しました。西洋をモデルにした歴史叙述にとらわれることなく、ヨーロッパを多くの地域の一つとして捉え、日本人の歴史観に地球的視野を与えるという貢献をしたと思います。

[2] 今西錦司と「棲み分け」論

「棲み分け」概念を軸にした今西進化論は、生物は元は同じ一つのものから「分化」してきたのだ、という自然観にもとづいています。同じものから分化したので相似ているというのです。分化したので相異なるところもあります。「相似」と「相異」は今西が生物の世界を理解するときのキー・コンセプトです。相似た個体が「種社会」をつくり、相異なる種社会とは「棲み分け」るのです。今西進化論にとって進化とは「分化」といいかえられます。それは競争ではありません。分化して「棲み分け」が進むので、分化(すなわち進化)すればするほど種社会の数が増し「空間の密度化」が高まると考えるのです。言いかえますと、分化して多様になっていくのが進化だという理解です。これは強大なものが弱小のものを駆逐する「自然淘汰(弱肉強食)適者生存」の生物観とはまったく違います。生物の歴史を多様化としてとらえるのです。

さて、この自然観に影響されて、今西の弟子の梅棹忠夫は「文明の生態史観」を書きました。それは唯物史観と真っ向から対立する歴史観になりました。

唯物史観の立場は「人間は道具(生産手段)を用いて環境を作り変える。道具の発達が生産力を上げ、生産力の担い手である人間は階級闘争を通して、奴隷制社会―封建社会―資本主義社会の発展段階を経て、最高度の生産力を実現して無階級の共産社会を作りあげる」というものです。

生態史観の立場は「人間ではなく、環境(生態)が人間の社会と文化の根幹を作る」というものです。少し具体的に言いますと、「ユーラシア大陸の中央部には草原地帯があり、そこに遊牧社会が生まれた。草原地帯に隣接する湿潤地帯には農業社会が生まれた。遊牧社会と農業社会は環境(生態)の産物である。遊牧社会は移動を本質とし、定着を本質とする農業社会を襲う。二つの社会の闘争がユーラシア大陸の歴史だ。日本と西欧とは、遊牧社会の暴力に蹂躪されなかったので、自然生態系が遷移を遂げて極相に至るように、順調に発達して近代社会になった」というのです。生態史観は地域の環境(生態)を基礎に据えて、人間中心の唯物史観に真っ向から挑戦したのです。

マルクスの階級闘争の唯物史観は、ダーウィンの自然淘汰の進化論と親縁性があります。実際、マルクスは『資本論』第一巻をダーウィンに謹呈したいという趣旨の書簡を送りました。ダーウィンは謝絶しましたが、マルクスの弱肉強肉の資本主義社会論と、ダーウィンの適者生存の生物社会論とが似ているのは、誰の目にも明らかです。

一方、今西錦司の『生物の世界』はダーウィン進化論に対して反論したものです。その最終章は「歴史について」と題されています。今西はその最終章で生物社会の歴史を扱い、「生物もしくは生物の生活というものの中には、ただ単に生きがためということをもってしてはどうしても解釈できない一面があり、意図するとしないとを別として生物が美しくなって行った」ことに「生物のつくる社会の自己完結性」を見出していま

す。そしてこの生物のもつ自己完結性をこそが生物の「主体性」の発露だと論じています。自己完結性をもって生物の社会は互いに「棲み分け」というのです。

今西は「生物と環境とは別々の存在ではなくて、一つのものから分化発展し、一つの体系に属している」という理解に立っています。今西の生物社会の棲み分け論が、梅棹の生態史観、すなわち環境(生態)によって規定され自己完結性をもつ遊牧社会、農業社会、近代社会という人間社会の「住み分け」に応用されたことは疑いありません。

今西は生物の社会を「種社会(スペシア)」、種社会がつくりあげる社会総体を「生物全体社会(ホロ・スペシア)」、それを包摂する地球を「ゲオ・コスモス」と呼んでいます。種固体・種社会・生物全体社会・ゲオコスモスのように今西の目は地球を視野にいれています。梅棹忠夫を初代館長として設立された国立民族学博物館は、地球に生存するすべての民族を対象とし、アングロサクソン民族やゲルマン民族、そして日本民族も特別扱われられません。すべての民族は自己完結性を持ち、互いに対等な存在として扱われ、各民族の社会・文化・歴史を研究する機関になりました。すでに三十年の歴史を持ち、世界の様々な民族についての専門知識をもつ歴史家が育っています。

さらに生物の主体性を認める今西の立場は、霊長類(サル)の社会・文化・歴史を扱うものに広がりました。サルを個体識別し、そのパーソナリティを描き、文化と歴史を書く学者が誕生したのです。特に霊長類社会の研究では「高崎山のサル」の社会の文化と歴史を描いた伊谷純一郎氏がトマス・ハクスレー賞に輝きました。人間中心主義の歴史を批判し、生物の歴史という新しい分野を切り開いたのです。今西学派の霊長類研究者はサル社会の歴史叙述に道を開きました。

これはもはや西洋中心主義ではありません。発展段階論でもありません。人間中心主義でもありません。

さて、学問は互いに関係しています。ダーウィンの進化論はマルクスの唯物史観に影響を与えました。同じように、今西の「棲み分け」論は梅棹の生態史観や今西学派の霊長類の歴史叙述に影響を与えました。ダーウィンとマルクス・マルクス主義との関係は、今西と梅棹・伊谷などの今西学派との関係になるでしょう。

今西は西田幾多郎の影響を受けました。西田哲学の特徴は「場所」の哲学です。それはヘーゲルの「時間」の哲学と対照的な位置にあります。ヘーゲルの弁証法哲学はマルクスの弁証法的唯物論に強い影響を与えました。ヘーゲルも西田も、近代哲学の父カント哲学を批判的に吸収して自己の哲学を立てました。カントは『純粹理性批判』で先験的感性の形式として「時間」と「空間」があると述べました。

ヘーゲルは「時間」にひきつけて世界を理解して『歴史哲学』を書き、ヘーゲルの影響を受けたマルクスは人類史を生産力の発展という直線的時間の中におき、ダーウィンも進化という時間軸で生物を理解をしました。

一方、西田はカントが『純粹理性批判』で「時間」とともに出した「空間」にひきつけて世界を理解し『場所の哲学』を樹立し、西田哲学の影響を受けた今西は人類を含む生物を「棲み分け」という空間の中でとらえ、その影響を受けた今西学派は自然環境という生態という空間の中で人間や生物の歴史を叙述してきたのです。こうして

哲学	西田幾多郎	場の哲学	ヘーゲル	歴史哲学
自然観	今西錦司	棲み分け	ダーウィン	自然淘汰
歴史観	梅棹忠夫他	生態史観	マルクス	唯物史観
[特徴]		[空間志向]		[時間志向]

という関係を見出すことができます。スタンスが対照的です。「ヨーロッパ的時間」に

支配されない空間の発見が、哲学、自然観、歴史観において果たされているということです。

[3] 南方熊楠の方法論「類推」

南方熊楠は、近年まで注目されてきませんでした。それどころか、有力な知識人であった桑原武夫などによって「南方は博覧強記であるが、理論がない」とまで評価されていました。

そうした通説に挑戦したのが鶴見和子（1918-2006）による一連の南方熊楠研究です。彼女は沢山の南方熊楠論を著しましたが、英文の論文（Minakata-Mandala: A Paradigm Change for the Future, 1995）はその整理された最終報告です。この論文を公表後、77歳の鶴見和子は、突然、脳出血で倒れました。生命はとりとめましたが、実質的には、鶴見の最後の、しかし、珠玉の論文です。

鶴見は戦前にアメリカのヴァッサー大学で社会科学方法論としてのマルクス主義の研究で修士号をとり、戦後はプリンストン大学で近代化論の研究で博士号を取りました。欧米の研究成果に通暁している学者です（1965年には助教授としてブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとっています）。

ここで上記の論文を逐一紹介をする余裕はありませんが、そのエッセンスだけに絞ると、鶴見の見出した南方の理論的貢献は、第一に、因果律の限界を指摘して、偶然性をとりこんだ「縁起論」を駆使したことです。第二に、演繹法・帰納法よりも「類推」という方法論を用いたことです。

因果律というのは、一つの原因には一つの結果がある。原因と結果には一対一の対応関係がある。同じ原因からは同じ結果が生まれる。このように原因と結果の必然性を強調する論理です。それゆえ偶然性は除外されます。ニュートン力学の世界です。自然科学では、因果法則を解明するのが目標でした。いまでこそ、特に1990年代になって脚光をあびたプリゴジン（Ilya Prigogine）などに代表されるカオス理論や、ザデーのファジー・ロジックなどが知られていますが、偶然性をとりこんだ自然理解を南方は百年前に先取りしていたのです。

南方は、19世紀のヨーロッパにおいて確立した自然科学・社会科学の単線的・直線的な因果法則や因果論の根底的批判を「縁起論」を武器に行いました。南方自身の言葉を借りると「今日の科学、因果は分かるが、縁が分からぬ。縁は因果の錯雑して生ずるものなれば、諸因果総体の一層上の因果を求むるがわれらの任なり」（土宣法龍宛書簡）と述べています。文中にある南方のいう「諸因果の総体」は地球大に広がるものです。南方の見ていたその総体を鶴見は「ミナカタ・マンダラ」と名付けました。

西洋ではユング（1875-1960）が1928年頃からマンダラを考えはじめ、1950年に『マンダラ・シンボルイズム』を書き、1952年にはシンクロニシティ（共時性）の概念で、それぞれ独立した出来事が、ある時点で同時に起きる偶然性を説明しました。森羅万象は「諸因果の総体」なので、いくつかの出来事が、どこかで関係していた因果が縁（偶然）で一致して同時に起きることもありえます。共時性は同時多発性といってもよいでしょう。

今から2500年程前に、ギリシャで自然哲学者、中東で預言者、インドで釈迦、中国で孔子が共時的に出現し、人類の精神史の画期を築きました。カール・ヤスパースは『歴史の起源と目標』で、これを「枢軸時代」と名付けましたが、南方はこのような地球大の広がりの中で起こる現象として人類史を眺めていました。

第二の南方の貢献は方法論としての「類推」です。南方自身の言葉使いでは「やり当て」「まわり合わせ」というもので、鶴見もその言葉を用いていますが、論理学の用語では「類推」というべきものです。

一例をあげましょう。南方の作品『十二支考』（1914-23）の中に「田原藤太（秀郷）竜宮入りの話」があります。龍は中国に起源し、日本など東洋特有の想像上の動物だと思われていました。しかし、南方は、爬虫類やヘビ・トカゲ・ワニ、サメなどの地球上の分布を調べ、各地の民話・絵画・彫刻を照合しながら、龍の話が史話、伝説、絵画などで世界各地にあることを広く例証し、田原藤太秀郷にムカデ退治を頼んだ龍はウミヘビであり、秀郷が退治したムカデはゴカイ類だという結論を導きだしています。一つの地域で謎が解けると、他の地域でも同じ関係のあることを類推して謎を解いていくのです。インド、アラビア、東南ヨーロッパなどで龍・ヘビが海底に財宝を隠し持つという話が多くあり、これから類推して、秀郷の招かれた竜宮は琵琶湖底だと推論しています。

ちなみに、今西錦司も『生物の世界』の第一章（「相似と相異」）で、類推を方法論とすることを提唱し、「類推の合理化こそは新しい生物学の生命であるとも言い得るであろう」と述べています。今西学派の霊長類学は、霊長類の社会や文化や歴史を発見しました。その方法は、当初は擬人主義と批判されましたが、擬人主義という批判自体が示していますように、人間社会からの類推によっているのです。

南方熊楠にも今西錦司にも方法論として「類推」が活用されています。両者は西洋起源の演繹法や帰納法を心得たうえで「類推」を方法論としたのです。

演繹法には数学に典型的なように具体相がありません。帰納法も具体的な事例をいくつもあげながら、そこから一般的結論を引き出すので、最後には具体相は消えます。

それに対して、類推では具体相を失われません。類推は具体的事実にかかわる推論です。ある事例の関係が分かると、別の事例の関係についても同じことが言えるであろうと推論するもので、特殊から特殊への推理ということができます。類推では特殊性や多様性は消えません。これが特殊性から一般性にいたる帰納法との決定的な違いです。類推は異なるものを異なるままに理解する具体的な論理です。具体的なものを排除する論理ではなく、多様なものを多様のままに認めるのです。

多様性を認めながら、しかもそれがバラバラにならないで、一つのまとまりをもつ。それが「諸因果の総体」としての世界です。南方が凝視していた相互に関連しつつまとまりある世界を鶴見は「ミナカタ・マンダラ」と名付けていますが、鶴見のいう「ミナカタ・マンダラ」は地球における森羅万象と言い換えられるでしょう。

鶴見和子は、南方の縁起論を通して、歴史の必然性を発見する使命をもった唯物史観と近代化論の歴史にキッパリと見切りをつけました。世界のすべての地域には固有の「諸因果の総体」が働くという確信を得て、地域の多様性を認め、地域ごとの内発的発展の道があることに気付いたのです。もはや西洋がモデルでなくなっただけでなく、日本もモデルではなくなり、どの地域にも存在理由があるという立場です。その影響は若い地域研究の学者に出はじめています。

[4] 歴史叙述の新局面

さて、以上から何が言えるでしょうか。今西や南方の学問は、洋学の拒否の上にはではなく、洋学の受容の上に、花開いたものです。もはや洋学の受け売りの時代は終わりました。受け売りを拒否して、排他的な国学を立てる時代でもありません。今西「棲み分

け」論も南方「マンダラ」論も洋学との対話は十分に可能です。歴史学では

1) [実証主義] 近代歴史学の最良の方法としての個別実証主義は残ると思います。ただし、実証の対象は従来のような文献のみならず、フィールド・ワーク（現地調査）がますます重要になることは疑いありません。その対象は、人間社会のみならず、生物社会、非生物（地球環境）なども含まれるに至り、歴史学は人文・社会・自然諸科学の総合学の様相を呈するようになると思います。

2) [脱・西洋中心史] ヨーロッパ史を規準（モデル・鑑）にした歴史叙述はしだいに書かれなくなるでしょう。それは洋学受容期の歴史学の様相で、もはや歴史学の本流にはなりえないと思います。

3) [脱・国粹史] ナショナリズムに偏した歴史叙述は、対外関係が緊迫したときに、書かれることがあるでしょうが、それが主流になることはないと思います。『新しい歴史教科書』は日中関係、日韓関係の緊張の高まりの中で生まれた産物です。『国民の歴史』は歴史の体裁をとった自己主張にすぎません。それらは歴史学の本流に影響を与えず、賛否両論のある多くの解釈の一つにすぎない、というのが歴史家の共通理解だと思います。

4) [地域史・地球史・Glocal history] 従来の西洋史、日本史、東洋史のほかに、日本史と東洋史をあわせた地域史として「アジア史」という分野も生まれており、旧来のタコ壺的な歴史叙述は総合されていくでしょう。アフリカ史、東南アジア史、オセアニア史、中央アジア史・・・などが対等の地位を占めるものになるでしょう。いずれも「地域史」の一分野を形成しつつあります。「地域」とは「地球」を何らかの規準（地理、政治、経済、宗教、気候、生態等々）で切り取った時空間ですから、地域と地球の関係は部分と全体との関係です。部分なくして全体なく、全体なくして部分はありません。それは「多即一、一即多」という華嚴的世界観とも相通じ、地域史の高まりは同時にグローバル史への関心を高めるでしょう。地球を視野にいれた地域史という意味でグローバル・ヒストリーの時代になると言ってもよいと思います。

ともあれ、以上のことは、明治5年の学制で始まった「洋学の受容」の時代が終わり、近代歴史学を含む「洋学」がすっかり土着化したことを物語るものです。